

第四百十一回 青葉会

令和二年七月二十二日（水） 投句 二十九日（木） 選句締切 によるウェブ句会

〈選者〉 ◎川口孤舟

〈投句・選句〉 伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子
小早健介 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 長谷見びん
福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛
渡邊盛雄
安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆
早川充章 松崎浩 村田くに子 山本三恵

〈選句のみ〉 ○は特選「天」 ◎は孤舟選者の選

十点句 ◎無愛想は親譲りにて鰻焼く 恵洲 (○そ・孤・弘・千・堂・充・正・啓・浩・く)

九点句 荒梅雨や木の家に住み五十年 盛雄 (眞・紀・忠・五・○弘・び・充・く・天)

八点句 ◎山門をひたと閉ざして梅雨の寺 恵洲 (孤・健・敏・隆・充・○正・浩・く)

七点句 草茂る親棲みし家売りにけり 忠彦 (紀・弘・た・び・浩・規・天)

六点句 船虫の何やら謀議して散りぬ 孤舟 (紀・○堂・昇・び・○啓・○浩)

寡婦長き姉の夕灯青山椒 弘子 (紀・○忠・敏・び・啓・恵)

人恋ひつ家居を通す梅雨の空 びん (紀・○五・龍・ゆ・昇・三)

遊ぶ子の無きブランコに夏落葉 けい子 (健・千・敏・○昇・浩・く)

裏返る海月に悩みあるやなし 孤舟 (そ・紀・堂・昇・啓)

旅に飢えせめて旅の書西日落つ 健介 (ゆ・規・く・け・盛)

百日紅今朝咲き初めと亡き母に 堂哉 (紀・○千・た・浩・盛)

◎檻の中豹半眼に醒めて朱夏 びん (紀・孤・五・恵・啓)

◎羅や羽織る棋士あり若き肩 啓子 (○眞・○紀・忠・○亜・○け)

◎気心の知れしつきあひ泥鰯なべ 亜也 (紀・孤・堂・充・○天)

◎七夕や願ひの届く幼文字 忠彦 (孤・○た・昇・く)

◎白靴や背筋伸ばしてタラップへ 堂哉 (そ・孤・弘・亜)

◎もぎし茄子天空の紺映しをり ゆたか (紀・孤・孝・龍)

◎風神と海原をゆくヨツトの帆 昇 (そ・五・け・盛)

◎浜木綿や風に乱れて朽ち小舟 けい子 (紀・孤・○龍・○ゆ)

◎長梅雨や今日もどこかで川あふれ さらお (紀・び・規)

◎一幕毎（ひとまくごと）消毒徹底夏芝居 紀久男 (眞・忠・○健)

◎雨乞ひの姫の色香に破戒せり（鳴神） 全 (た・正・盛)

◎のべつ啼く姿みせずにはとどぎす 全 (そ・○規・天)

◎恐れなく手をつなぐ児ら梅雨晴間 忠彦 (眞・紀・ゆ)

◎夏の蝶形状記憶の翅畳む 孤舟 (健・○恵・啓)

◎赤坂を下りて上る土用かな 五郎太 (紀・弘・亜)

◎方舟の説話空しや大出水 健介 (紀・孤・千)

◎プードル背負ひバイク疾走梅雨晴間 千恵 (眞・紀・○盛)

◎梅雨豪雨筑紫次郎を暴れさす 全 (紀・健・規)

◎銀河系の我も住民星祭る 恵洲 (孤・充・正)

◎夏の霧去りて奇巖の妙義かな 堂哉 (そ・た・孝)

◎長旅の旅程定まる夜涼かな 全 (紀・弘・く)

◎晴みじか今転生の鬼やんま びん (五・亜・三)

◎潮騒や椰子の浜辺の籐寝椅子 昇 (紀・孤・ゆ)

◎紫陽花の潔斎のごと雨に澄む 全 (孝・け・三)

◎散らばった記憶の断片（かけら）繋ぐ梅雨 啓子 (紀・孝・龍)

◎山好きの亡き妻恋し登山靴 規雄 (紀・敏・正)

◎洞庭の水位も上がる大出水（おおでみず） 亜也 (紀・五・健)

二点句

疫に雨命見つめる梅雨の日々 忠彦 (紀・千)
 竹婦人くびれしところ見当たらず 孤舟 (昇・堂)
 「夢(む)」の軸に蓮のつぼみ今日の床 五郎太 (紀・三)
 銭亀の長き首伸べ泳ぎくる 全 (紀・堂)
 コンビニの深夜の桃にバーコード 弘子 (紀・忠)
 涙落つるまでの瞬き夕螢 全 (紀・○孝)
 おぞましや脚へ鏡花の山海鼠 全 (垂・三)
 悪筆の文書き終へり缶ビール 健介 (紀・正)
 雨音が色々変はる梅雨の夜 全 (隆・天)
 よしこのリズムけだしなまめく阿波の夏 全 (紀・け)
 行列の遅々と進まぬ暑さかな 恵洲 (た・充)
 さくらんぼ残る一粒鎮座せり 堂哉 (紀・び)
 老鶯の声のしきりに書に耽る ゆたか (紀・龍)
 海月にも行く宛のあり隅田川 びん (紀・恵)
 さくらんぼ人間最初は赤ん坊 正明 (紀・昇)
 グラジオラス止まらぬ地球温暖化 全 (紀・隆)
 青みどろ値上る社会保険料 全 (真・紀)
 丈高くグラジオラスのグラマラス 全 (千・隆)
 塩まみれびくりともせぬなめくじら 天牛 (紀・隆)
 梅雨明けの待たるる日々や図書館へ 全 (紀・龍)
 梅雨激しなれどコロナは衰えず 全 (紀・ゆ)
 自粛終へ子と酌むワイン巴里祭 盛雄 (紀・敏)
 冷で呑む「日本の遺産」伊丹諸白(もろはく) 全 (紀・天)

一点句

新入生待機したまま夏迎え そらお (紀)
 ウイルスには負けじと集ふビヤホール 全 (忠)
 梅雨最中初タイトルを十七歳(棋聖) 紀久男 (○隆)
 到来の水なすそやす夫婦(めをと)かな 全 (三)
 朝のジャズスマホで聴ひて胡瓜揉む 忠彦 (盛)
 放屁虫好きで生れ来し訳でなし 孤舟 (紀)
 悪臭と乞食おんなと梅雨ふかし 五郎太 (垂)
 初蟬のあさき眠りに遠くなく 全 (く)
 首塚や夏鯉薙く用水路 弘子 (紀)
 コロナ禍にプールで歩行恐々(こわこわ)と 弘子 (紀)
 やつと晴れいずれの家も満艦飾 全 (紀)
 くちなしのひそかに咲きし木の間蔭 全 (規)
 籠り居や十葉の香を懐かしむ 全 (規)
 花火まで自粛を強いるコロナかな 全 (紀)
 天空より轟き落つる滝の修羅 昇 (○恵)
 ペナントのしとどに濡るる開幕戦 啓子 (紀)
 遠き日や妻の手をとり夏の山 規雄 (紀)
 兜虫死しても角を高々と けい子 (敏)
 馬手にペン弓手に団扇訳すすむ 天牛 (紀)
 祭なき浪花の文化鱧の皮 盛雄 (け)

《句評》

十点句「無愛想は親譲りにて鰻焼く」

①弘子さん・老舗には不愛想な職人肌の主が似合います。

九点句「荒梅雨や木の家に住み五十年」

①弘子さん・マンションと違って雨の音も木造の家はよくわかります。雨の降る前の匂いもしたように思います。雨漏りに洗面器をあてたことなど思い出しました。やはり日本には木の家ですね。

※孤舟：満艦飾は季語にあらず

※孤舟：開幕戦は季語にあらず

八点句「山門をひたと閉ざして梅雨の寺」

① 隆さん・・目にみえぬコロナの威力は山門の重き扉も閉ざす。

七点句「草茂る親棲みし家売りにけり」

① 弘子さん・・ご両親が住んでおられた家を手放す寂しさが草茂るに感じられます。

六点句「船虫の何やら謀議して散りぬ」

① 堂哉さん・・今月は小動物が沢山詠まれて愉快でした！今日は浅虫温泉に着いたのですが、旅のスタートは佐渡でした。その岸辺で久しぶりに船虫を楽しく見ました。そんなこともありこの句を特選に頂きました。
亀の句や海月の句も面白いです。

「人恋ひつ家居を通す梅雨の空」

① 五郎太さん・・句意は「昔、ある人を恋したことがある。今、家にいるとどこの部屋からも陰鬱な梅雨空が目に入る日々が続いているが、あの時も梅雨だったが、若く、心が晴れ晴れする思い出である」と言ったところではないでしょうか。人恋つで切れていると理解しました。「人恋ひつ」「家居を通す」の表現にも感心し、天にいただきました。

五点句「寡婦長き姉の夕灯青山椒」

① 忠彦さん・・私の亡き姉を思い出しました。夕灯と青山椒は上手い。

「羅や羽織る棋士あり若き肩」

① 亜也さん・・藤井新棋聖をさりげなく詠んでいるのを好感。若き肩が特にいい。
② 紀久男・・暗いニュースが続く中、マスコミが囃し立てる17歳の藤井棋士。あどけなさも残るが一寸大人っぽくなってきました。背広姿も和装になつても板についてきて七段・棋聖そしてタイトル続々獲れそうな勢いが感じられます。好句です。

「百日紅今朝咲き初めと亡き母に」

① 千恵さん・・生前の母の家にあつた花木が今自分の家に置いてあり開花したりすると私もそれを母に報告したりするので、そのお気持ちがよくわかります。

「気心の知れしつきあひ泥鱸なべ」

① 天牛さん・・気心の知れた人は泥ぜうなべがびたりとあつていてうまいと思いましたが、難しい言葉を使わずに気持ちを出しているところがいいですね。

四点句「七夕や願ひの届く幼文字」

① ただしげさん・・幼子の短冊に願いを描く様子にほのぼのとしたものを感じる。

「白靴や背筋伸ばしてタラップへ」

① 弘子さん・・白靴の清々しさがタラップを駆け上がる若々しさと共に気持ち良い句
② 亜也さん・・タラップを昇る機会はありませんでしたが、ちよつとした舞台なのを絶妙に表現。

三点句「一幕毎（ひとまくごと）消毒徹底夏芝居」

① 健介さん・・漢字のみのユニークな句でかつ臨場感あり。

「夏の蝶形状記憶の翅畳む」

① 恵洲・・形状記憶という思いがけない言葉を翅を畳む蝶にあてはめて、その感じが良く出ていると思います。巧みです。

「赤坂を下りて上る土用かな」

① 弘子さん・・土用の蒸し暑さが坂の町を歩く気持ちの重さで伝わりました。
② 亜也さん・・昔のコロンビアレコードから赤坂見附にかけての風情？江戸を今につなげた功あり。

「長旅の旅程定まる夜涼かな」

① 弘子さん・・旅のプランを考えることはここしばらくなくなかったです。夜涼がすつきり。

「山好きの亡き妻恋し登山靴」

① 正明さん・・亡くなった愛妻の愛用だった登山靴、切なさが迫り辛いですね。

「晴みじか今転生の鬼やんま」

① 五郎太さん・・梅雨の短い晴間に、目にしたヤゴからトンボへの羽化を転生と捉えた見事な句です。少し迷ったのは「（鬼）やんま」はトンボとともに三秋の季語である点です。しかしこの句が詠んだ情景は、今の時季のもので、「トンボ生まる」は夏の季語になっています。一般に、当季雑詠の場合、季節の先取りは許されると聞いています。ただ、あまり先の景を詠む―例えば中秋―のはどんなものかと思えます。こうした理解でよろしいでしょうか。
② 亜也さん・・単に羽化でなく転生と輪廻で捉え、しかもその主体が鬼というのがいい。

二点句「おぞましや脚へ鏡花の山海鼠」

① 亜也さん・高野聖。なにぶん鏡花ファンなのでつい。。。

「雨音が色々変はる梅雨の夜」

① 隆さん・繊細な人です。音で雨の様を想う貴重な人。

「さくらんぼ人間最初は赤ん坊」

① 紀久男・実にいい句と思う。小生の次点の句です。

「ラジオオラス止まらぬ地球温暖化」

① 隆さん・新型コロナの登場も地球温暖化とは話題にすらのぼらないご時世。

「丈高くラジオオラスのグラマラス」

① 隆さん・モンタレーの結婚式の飾り花はカーネーションとラジオオラスと聞いた。披露宴はダンス。賑いが聞こえてきそう。

一点句「ウイルスには負けじと集ふビヤホール」

① 忠彦さん・気持ちかわるので笑います。自粛したほうが良いのに！

「梅雨最中初タイトルを十七歳（棋聖）」

① 隆さん・藤井君の笑顔が梅雨を吹き飛ばした感。

「竹婦人くびれしところ見当たらず」

① 堂哉さん・思わず笑いました。

「悪臭と乞食おんなど梅雨ふかし」

① 亜也さん・梅雨ふかしとの組み合わせが絶妙。ただ、今の時代にこんな過激な句を作られた意図をゆかしく思います。

「馬手にペン弓手に団扇訳すすむ」

① 紀久男・奥様の介護で中断しておられた「プルタルク」の翻訳チェックを漸く奥様回復で再開。腕を上げた料理も徐々に奥様が出来るまでになられた模様です。

「天空より轟き落つる滝の修羅」

① 恵洲さん・男性的な滝の姿と音とを共に捉えて豪快さが良く出ています。滝の修羅の言い方が言い得て妙です。

「塩まみれぴくりともせぬなめくじら」

① 隆さん・いじめは人の本性。誰だあ、いじめたのは。

* * * * *

●次回青葉会

八月二十七日（木）午後一時半～五時 文京区民センター会議室

▲当季雑詠五句 投句二句

令和二年 八月二日

文責 紀久男



令和二年七月 青葉会報

一、関係者近詠

ハイウエイと農道抱きて山笑ふ (眞希子)

隣国もコロナ禍黄砂も送り来る 全

ビニールハウスの空きし余寒に烏骨鶏 全

露伸びてコロナ三密無き独居 全

鯉幟横並に天へ立ち泳ぎ 全

人住みて飯噴く匂ひ百千鳥 弘子

気を付けの測量ポール花の下 全

寄居虫へ外出自粛言ひ聞かす 全

朧夜やいよいよ長き禁足令 全

窓開けて四月の風の山手線 全

病葉を踏めば己も朽ちさうな 陽亮

妻の精気さながらうばひ新樹燃ゆ 全

噎せぬやう小匙にのせて氷菓子 全

己が胸倉にとまどふ初浴衣 全

――「森の座」8月号

令和二年八月五日

支那海の椰子の樹燃ゆる大夕日 盛雄

暗闇に小声往き交ふ螢の夜 全

初蟬や豪雨惨禍報ず中 健介

旅行かず閉じる旅の書大西日 全

西日射す福知山線ワンカツプ 紀久男

がらがらの文楽はねて鮓店へ 全

――きさらぎ句会7月

冷酒酌む廚の匂流れきて 充章

二の腕の白さ眩しき夏の果 全

湯浴みして交はす地酒や河鹿笛 全

荒梅雨や帰り支度の荷重し 彦十

音もなくサツキの花の落下傘 全

枇杷古木葉陰の濃さや実の淡さ 全

紀久男 記

